

変革の起点としての「コミュニティ」

榎本輝彦

1 市場原理の限界

小泉内閣の「聖域なき構造改革」の処方箋は、規制緩和、民営化に示される市場原理の導入である。市場は商品の効率的な生産や流通を実現する。政府の非効率な活動は、市場競争に委ねることによって、行政コストの削減と同時に経済の活性化が達成されるというシナリオである。

果たして、市場は効率を実現する仕組みなのだろうか。そうだとしたら、なぜ、バブルのような事態が生じたのか。なぜ、未だに金融機関は不良債権の処理ができていないのか。

バブル期を経験した私たちとは、今日の経済社会は極めて脆弱な構造に支えられていることを認識しなければならない。

その第一は、市場は自らの構造を壊しかねない不安定要素を内在していることがある。かつて、アダム・スミスは、當利を目指した個々の経済活動は、結果として社会的全体の利益につながることを明らかにした。同時に、節度を超えた人間の性向は社会に混乱をもたらすことも危惧していた。その後、金融資本の発展に支えられた今日の経済は、投機家の合理的予想が市場価格を乱高下させるというパラドックスを生んでいる。この投機家の判断の実体はケインズが美人コンテストの投票になぞらえたように、他人が市場をどう評価するかというギャンブルなのである。

第二は、市場経済は、その成立条件である社会的基盤を壊しつつある、ということである。自然環境は生産のために収奪され、後戻りのできない環境破壊を進行させてい

る。多寡によってその質を決するものであつてはならない。金子勝（註1）は、労働市場における社会保障制度や職業訓練制度、土地市場における土地利用規制、金融市場における預金保険機構などの仕組みが整備されないと、市場は成り立たない。

競争は、弱者から順に市場から脱落させ、ついには市場そのものを麻痺させる。市場競争が安定的に機能するためには、一人一人の人間では処理しきれないリスクを社会全体でシェアするセーフティーネットが必要だと言う。市場に任せただけでは豊かさを担保できない。

2 コミュニティからの変革

私たちは悪化しつつある、国や自治体の財政状況の解決策を「市場＝効率、政府＝非効率」という単純な図式に委ねようとしている。問題は市場原理の不在なので

はない。むしろ、市場には市場らしさがない。たとえば、農村から都市に大量の労働力を移動させ、あらゆるモノの交換を可能にし、同時に地域の文化や伝統を駆逐してきた。経済はもとより、文化面でも社会を画一的、集権的な方向に収斂させ、今日の閉塞状況をもたらした。もはや、市場経済システムは臨界に達している。社会を再び活性化させるためには、異質さと多様性が必要である。人々がさまざまなネットワークを通じて、多様な関係を結ぶ「コミュニティ」に根ざした変革が求められている。

3 コミュニティの生成

神野直彦（註2）が言つよう、共同体内部での相互協力だけでは、治水や道路整備など人の生存を維持していくことに限界がある。この課題を共同体の外部から克服する仕組みが「政府」というシステムである。人々は共同体での生活の基盤を、税と引き替えに政府に委ね、さらに貨幣と引き替えに市場に委ねた。これによって、人々は安全、安心、利便性を得得し、その一方で主體性や自發性を喪失してきたのである。

それでは、共同体からコミュニティはどうい

う契機で生成されていくのか。市場は、地域固有の慣習や伝統が息づく共同体を貨幣という強制力で吸引する。こうした集権的な求心力をを持つベクトルに対抗しようと、ダイナミズムのなかから、コミュニティが孵化し、創発する。近年、各地域で導入されたある地域通貨の実践は、暴走する

市場経済に対する地域からの異議申し立てであり、グローバルズに対する地域のアイデンティティの矜持を示すものである。

とする市場や政治システムに対抗して、個人の主体性や自發性に立脚して、人と人が協働する場として新たな公共空間を創造したことによって達成しようとする公共空間

（2）ネットディー学校を支える人のつながり

兵庫県の播磨地域では、ネットディーが数年来行われている。こどもたちが自由にインターネットを使えるよう、住民が自発的に、学校の校内LANを整備する活動である。ネットディーは、行政や学校の下請けではなく、学校への奉仕活動でもない。住民が学校と協働して地域の教育に参加する、地域に開かれた学校をめざした市民活動である。

この活動は、リーダーである和崎宏（註4）の行動力に負うところが大きい。彼は地域の人々にコミュニティづくりに参加するきっかけを具体的に提示したのである。住民はネットディーへの参加を通じて、家庭と学校とのつながりや地域の人々とのつながりを実感し、活動の輪を広げている。学校はこどもたちが学ぶ場であり、また、地域住民の交流や防災の拠点でもある。ネットディーは、学校を支える人々が多様なネットワークを通じて新しいコミュニティを創造するモデルである。

4 コミュニティの多様性・多義性

（1）NPOの分権的な公共の原理

岡部一明（註3）は、「ビジネス大国」であるアメリカは「NPO大国」でもあることをさまざま例で報告している。ビジネスとNPOの関係は、互いに排除しあう関係ではなく、ビジネスが進展すればするほどNPO活動も活性化している。「ビジネス＝有償、営利、市場原理」、「NPO＝無償、非営利、奉仕」という単純な図式ではない。企業が資本市場から資金を調達するように、NPOも個人や企業からの寄付を募り、有償の専門スタッフを雇用している。これらの寄付金は免税措置がとられており、エンジニアと呼ばれる個人投資家がベンチャービジネスに投資するのと同様に、個人の資金が大きな役割を果たしている。

NPOが

企業と異なるのは、収益を株主への配当に回すのではなく、次の公共的な活動の資金に充てるという点である。旺盛なチャレンジ精神を称揚するアメリカの文化、社会の精神が、ベンチャービジネスやNPOを育む基礎となっている。NPOの活動は、これまでの政府による公共の独占から、多様な住民ニーズに機動的に対応しようとする分権

ダメスティック
バイオレンス
(夫やパートナーからの暴力)
から脱出しませんか。

私たち、同じ立場あなたと向き合います。
これからのために、下記のアドレスまでご相談ください。

E-mail:kabo8@abelia.ocn.ne.jp



DV被害者の会 コパン(なかま)

（3）オンラインショッピングと取引の信頼性を支えるコミュニティ

「楽天市場」の三木谷浩史は、「インターネット・モールは売り手と買い手を結びつけるOne To One Marketingである」と言う。「楽天市場」では、顧客から出店業者へのクレームや要望がホームページに掲載され、

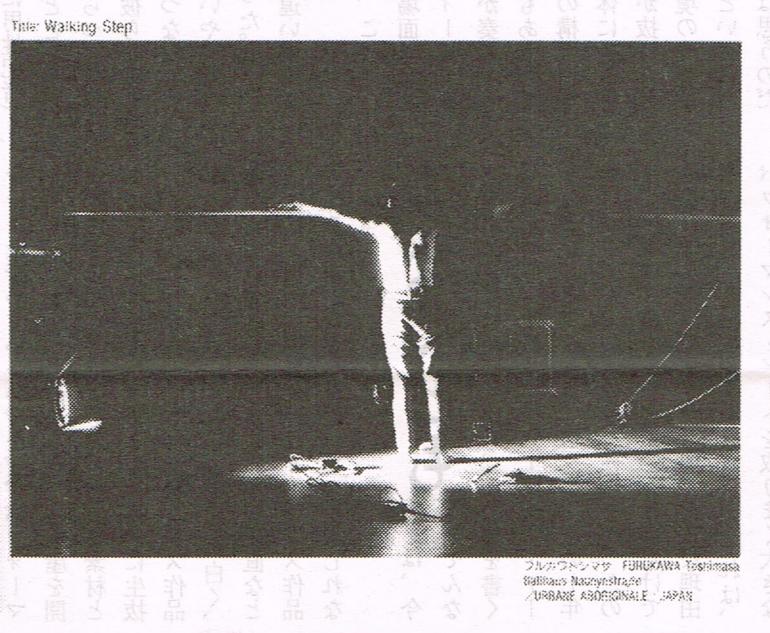
的な公共の原理を体现している。

多くの発表の場を与えられた感があり、特にパフォーマンス・アートに関しては、この時期に合わせるように多くの興味深い作品が登場した。このような動きは、なぜ起きたのだろう。それは、つまり、バブル経済で余ったお金が、アート・シーンに流れ込んできたせいではないかとボクは推察する。この頃のボク自身も、各地で行われるフェスティバルに積極的に参加し、文化振興基金をベースに自主公演やアート・フェスを主催した。作品の方も、アート・フェスへの参加で、刺激や影響を受けながら、より密度の濃いものへと成長していく。また、その過程で出会ったアーティストや、ディレクター等の関連で、今回の招待のきっかけとなつた92年のヨーロッパ・ツアーエにも参加することとなる。この時期を振り返ると、バブル崩壊など、どうでもよく、アート・シーンの活気の中にどっぷりと浸かり、パフォーマンス三昧の日々だつたような気がする。他の興味あるパフォーマンス作品も、より多く輩出され、今から思うと、まるでパフォーマンス・バブルの様相を呈していたかのようだ。ボクには思えてくる。

このように書いてくると、バブル崩壊で、不況にあえぐ日本の貧乏アーティストの怨み節や、作品の出来ない言い訳のように聞こえてくるが、(本当は、その通りかも知れないが)実は、ボクの言いかつたことは、そのような事ではない。パフォーマンスという芸術表現は、じつは、このよくなパフォーマンス・バブルの状況にこそ、その表現に力を持つてくるのである。ひとつひとつの作品は、いくら完成度が高くても、どのようにオーディエンスを感じさせようとも、それだけでは、いつかは、何者かに取り込まれてしまうのである。取り込まれてしまえば、その時点で、そのパフォーマンスが持つ特有の力が消えてしまい、パフォーマンスとして成立できなくなる。それ故に、常に新たな表現手段を模索し続ける運命にある。それならばな

ぜ、パフォーマンス・バブルのような状況が、パフォーマンスに力を与えるのであるうか。それは、おのののパフォーマンスが、お互いに影響し合い、共振し、常に新たな状況を生み出して行くからなのである。まあ、簡単に言えば、オーディエンスにとつて、ひとつのパフォーマンスを見るよりは、いくつかのパフォーマンスを続けて見た方が、より面白く興味深いし、またアーティスト同士もより深い影響を与える合うといったところだろうか。その点からいくとアート・フェスティバルなどは、パフォーマンスにとって絶好の表現の場であるわけだ。だから、90~93年にかけてのアート・フェス乱立状態は、パフォーマンス・アーティストにとっても、絶好の状況だったのだ。つまづくとアート・フェス乱立状態は、パフォーマンス・アーティストにとっても、絶好の状況だつたのです。それでも、親しんでいます。それはカリスマ的でも舞台的朗読でもなく、また自作自演故の真価であるというのは、自作詩朗読につきまとう幻想にすぎないのでしょうけれども、作品解説の息づかいの確かさが、手に取るよう伝わってきて、藤井詩の理解にとつても、また日本の現代詩の理解にとつても貴重な一枚となつていています。その藤井さんの現代詩の仕事のなかのひとつに、『日本詩は何處にあるか』という作品があります。この命名の前に立つ度、ぼくはその題名の正面きつた問いの立て方にいつも気後れを覚えてしまふのですが(そして藤井さんのその一連の詩を読む度に、また勇気づけられたりもするのですが)、今度の拙詩歌集とは、その問い合わせのほくなりの捲頭重来なのかもしません。

思えば昨年は、平成の西鶴を目指すといふ清水昶さんの句作や、出版では高橋睦郎さんの『倣古抄』(邑心文庫)、筑紫磐井さんの『定型詩学の原理』(ふらんす堂)など、定型への関心や成果も、現代詩という視座の裡でしっかりと維持されておりました。拙詩の作業もまた、現代詩としてのアクチュアリティを失うまとする配慮のもとでの、定型の試みです。短歌的韻律でうたつてみて、より明らかになつていつたことは、詩とは、うたとは、対象とその主体(うたう人、またそれを享



のすべてには、パフォーマンス・バブルを楽しむ方々が、海外のようにアート・フェスティバル等が出来るとしても、ボクは、それらのすべてを歓迎する。なぜなら、それらのすべてには、パフォーマンス・バブルを

歌集『死明』上梓のと 富 哲世

現代詩／定型詩

眼疾の 再来による手術をこの如月二十一日に控え、文字に目を遣ることもままならず、原稿の行く末をSTUDIO FUJIのうえなおこ・窓月書房の山本繁樹の両氏に半ば委ねたまゝ、このところ詩人藤井貞和さんが去年出した自作詩朗読CD『パンダ来るな』(実際は電子ブック付。ぼくは声だけ聴いています)に親しんでいます。それはカリスマ的でも舞台的朗読でもなく、また自作自演故の真価であるというのは、自作詩朗読につきまとう幻想にすぎないのでしょうけれども、作品解説の息づかいの確かさが、手に取るよう伝わってきて、藤井詩の理解にとつても、また日本の現代詩の理解にとつても貴重な一枚となつていています。その藤井さんの現代詩の仕事のなかのひとつに、『日本詩は何處にあるか』という作品があります。この命名の前に立つ度、ぼくはその題名の正面きつた問いの立て方にいつも気後れを覚えてしまふのですが(そして藤井さんのその一連の詩を読む度に、また勇気づけられたりもするのですが)、今度の拙詩歌集とは、その問い合わせのほくなりの捲頭重来なのかもしません。

思えば昨年は、平成の西鶴を目指すといふ清水昶さんの句作や、出版では高橋睦郎さんの『倣古抄』(邑心文庫)、筑紫磐井さんの『定型詩学の原理』(ふらんす堂)など、定型への関心や成果も、現代詩という視座の裡でしっかりと維持されておりました。拙詩のアクチュアリティを失うまとする配慮のもとでの、定型の試みです。短歌的韻律でうたつてみて、より明らかになつていつたことは、詩とは、うたとは、対象とその主体(うたう人、またそれを享

■プロフィール (ふるかわ・としまさ) 一九五九年大阪市浪速区日本橋4丁目14-1 池田ビル2Fトリオ内 TEL&FAX: 06-6636-6835 http://www.kleinbunko.com E-mail: ossaka@kleinbunko.com

■プロフィール (ぶるかわ・としまさ) 一九五九年大阪生まれ。大阪芸術大学文芸学科中退。80年代後半より、パフォーマンス活動を始める。90年代後半より、パフォーマンス活動を始めます。92年、パフォーマンス・ヨーロッパ・ツアーエに参加後、半年程滞在中。現在に至る。

拙詩

のアクチュアリティを失うまとする配慮のもとでの、定型の試みです。短歌的韻律でうたつてみて、より明らかになつていつたことは、詩とは、うたとは、対象とその主体(うたう人、またそれを享

■プロフィール (とみ・てつよ) 神戸市生まれ。詩集『血の月』(一九九三年、蜘蛛出版、詩集下旬に刊行されます。和綴装・A5判・六十頁・定価一八〇〇円(税別)です。 *なお、藤井貞和朗読CD『パンダ来るな』の情報は、http://www.nipponasahiisugiyu21/で見る

■プロフィール (とみ・てつよ) 神戸市生まれ。詩集『血の月』(一九九三年、蜘蛛出版、詩集『天人五衰』(一九九九年、ルナ企画)、詩集『殺佛』(二〇〇〇年、ルナ企画)。朗読・パフォーマンス・音楽企画など、現代詩を中心とした活動を展開中。

メディアに隠された場所で —— ヨーゴへの旅

元吉瑞枝

私がヨーゴを訪れたのは、二〇〇一年九月二日、まだ、あのアメリカでの同時多発テロやその後のアフガン空爆などを知る前のことである。

かつて 非同盟、自主管理社会主義を掲げた



ベーター・ハントケ 訳
元吉瑞枝 著

いま新たに聞かう 対ユーゴ空爆の意味を
詩人の言葉はメディアの言葉を超える
文庫版 本体1,500円(税込)

多民族・多文化の国家であつた旧ユーゴは、一九九一年のスロベニアとクロアチアの独立以来、数十万人の死者、数百万人の難民を出す内戦が長くつづいて解体し、五つの独立した共和国に分かれたが、この内戦の過程で欧米諸国は、セルビア共和国とモンテネグロ共和国から成るユーゴスラビア連邦共和国、いわゆる新ユーゴに対して、一貫して制裁の立場をとり、九一年の国連からの追放や経済封鎖、文化交流の停止などをつづけ、九九年には、新ユーゴ内のコソボ共和国のアルバニア系住民の分離・独立要求に対する弾圧を理由に、NATOによる七十八日間にわたる激しい空爆を行なつた。それらの政策はすべて、ユーゴ/セルビアによる他民族への抑圧に対する制裁としての「人道的介入」という論理に基づくものであり、メディアも世論の多くもそれに同調していた。他民族に対する抑圧は（セルビアに限らず）裁かれねばならないとしても、それがいわゆるダブル・スタンダードであり、欧米が当時世界に大量に流した情報の多くが操作されたものであり、当時「人権擁護」の名のもとに行なった政治が多く思惑や駆け引きを含んだものであつたことが次第に明らかになりつつある。その後、対アフガン攻勢を通じて、アメリカをはじめとする「国際社会」

の掲げる正義のレトリックの奇怪さがいつそう目に見えるようになつたが、「アフガンの前にはコソボがあつた」（高村宏「情報操作の恐ろしさ」『Ashikabi Journal』No.37）である。

市場経済に組み込むことや東欧諸国の社会主義政権の転覆を目標に掲げていた極秘文書の存在を挙げている（ミンエル・チヨスドフスキ著／ビル・トッテン編『崩壊したユーゴスラビアと植民地ボスニア』<http://www.biltotten.com/japanese/low1/00285&00286.html>）。また最近アフガン問題との関連で、ノーム・チヨムスキーハーは、アメリカが、「セルビア人から過度の残酷な反応を誘い出すためにセルビアの警察と一般市民を攻撃した」と公言している（かつての「テロリスト」コソボ解放軍を、みずからのセルビア攻撃においては「フリーダム・ファイター」として利用し、戦いのあと彼らがアメリカの同盟国マケドニアで同様の行動を起こすと、再び「テロリスト」として見放したこと）に言及し、アメリカがテロを含む陰謀を常套手段として、ユーゴでも行なつていたことを指摘している（『週刊金曜日』二〇〇一年三八三号）。まさに、アフガンの前にユーゴありき、なのである。

冷戦 終結後、アメリカをはじめとする欧米諸国は、みずからは犠牲をねうことなく、敵を壊滅できることを誇ってきた。イラクやユーゴ、そしてアフガンに対する空爆は、その最たる例である。そして「戦争のあと、勝者は敗者の戦争罪を断罪したが、自らの犯したことについては沈黙を守つた」（星田淳『空爆下ユーゴからの通信』北海道エスペランソ連盟発行）といわれるような流儀がいつの場合でもまかり通ってきた。「はじめて銃が（弱者から強者へ）反対方向に向けられた」（ヨムスキーノ前掲書）二〇〇一年九月十

シエビッチ政権も空爆によって倒れたのではない。犠牲となつたのは、爆弾で倒れた人々であり、制裁のもとに苦しんだ人々である。テロの犠牲者も同様である。アメリカとアメリカの人々が同一ではないよ

うに、ユーゴの為政者とユーゴに生きる人々は同一ではない。国家や民族の概念ではとらえられない存在、メディアによつて操作される空間には存在しない生、そこにこそりアリティがあるのでないだろうか。ドイツ語圏の作家ハントケが、あえて空爆下のユーゴに赴き、当地の人たちに直かに歩き、広場や橋の上で毎週ロツク・コンサートを開いていたように、いま夕方のカラメグダン公園やクネズ・ミハイロフ通りで

ベオグラード に立つと、

そこでも爆撃された建物がそのままの姿で、あちこちに残つてゐるのが目に入った。けれどもその傍らで人々は、それについては多くの語ることなく、明日に向かって生きているように見えた。かつて空爆の中で、胸に抗議のターゲットマークをつけた街を

こだわつたからではないだろうか。（ペーターハントケ『空爆下のユーゴスラビア』）として、その姿や言葉や表情を確かめようとしたのも、そのような「ヘリアリティ」にこだわつたからではないだろうか。（ペーターハントケ『空爆下のユーゴスラビア』）

別の事件や集団の動きを追うのではなく、特ニユースにはならない人々のふだんの様子を描いていること、そしてそれを「事実」として（事実のふりをして）「報道」するのではなく、「自分の見たこと、感じたこと」として、「自分だけの言葉で」表現しようとしている点である。

私のユーゴへの旅は、ユーゴ空爆からもう一年以上経過した時のひときを楽しんでいる。他の都市と

は、仕事を終えた人たちが、日が暮れるまでのひとときを楽しんでいます。他の都市と

点でなされたものである。その間、二〇〇〇〇年秋に民衆の圧倒的な声の前にミロシエビッチ政権が崩壊し、国際社会の制裁も解け、ユーゴはもう「禁断の国」ではなくなつてきている。しかし、私が旅行前に尋ねたところ、日本での旅行社からは、ベオグラードのホテルの予約は扱つていないとの返答が返ってきた。また、ユーゴと（かつては同国内であつた）他の共和国内の交通は今も不便で航空便が全くないか非常に少ないため、いつたんウイーンなどに出て遠回りしないといつた。チュー・リッヒからベオグラードに向かう飛行機の中からは、爆撃されたノヴィサド近郊の橋が川の中に崩折れたままになつたのが見えた。NATOは軍事施設

る多くの橋を「誤爆」し、その上にいた人々は犠牲になつたのである。

空爆下のユーゴスラビアで 一涙の下から問いかける

ペーター・ハントケ著／元吉瑞枝訳
定価1500円+税 B6判
ISBN4-8102-0214-3

著者は、ヴィム・ヴェンダーズ監督の『ベルリン・天使の詩』の脚本も手掛けた、現代ドイツ語圏文学の最も重要な作家の一人。本書は激しい論議を巻き起したが、著者は孤立しながらもNATO空爆に抗議し続けた。

同学社
〒112-0005 東京都文京区水道1-10-7 TEL:03-3816-7011

医学部看護学科教授の青春

城ヶ端初子（岐阜大学医学部看護学科教授）著
定価1600円+税 四六判 上製

中卒准看護学校から大学教授へ 15歳で能登半島の寒村を出て准看護学校に入学して以来、山口県で國境を越えて、いまや医学生に「看護とは何ぞや」を説くに至った著者の、元気フルフル、勇気ワクワク、目からウロコの青春グラフィティ。四年制看護教育の時代、わたしたちはどうすべきか。

さいろ社

〒658-0072 神戸市東灘区岡本7-2-10
TEL/FAX:078-453-6796 <http://www.sairosha.com>

全く変わらない光景である。戦争などなかつたかのように……もしそこに戦争の影があつたとしたら、そこに、このいまのひとときを楽しみたい、という思いが特別にこめられているように感じられたということである。私は、空爆時にはみんな地下室で抱き合つて難を避けたが、その後はまた離れ離れになつて、そんなことなどなかつたように元に戻つた、と当地の人が話してくれたのを思い出していた。「そんなことなどなかつたように」……各人の胸の中にしまつた忘却と記憶。それはまだ簡単には手を触れることができないもののように思えた。けれども、きっと、いつか何かのかたちで……否、いまこういうかたちで表現されているのだ。

別の日の別の光景。クネズ・ミハイロフ通りでベンチをさがしたが空いていなかつたので、端の方に一人の青年が腰かけていた。ベンチの反対の端の方に腰を下ろして休んだ。ふと気がつくと、すぐ近くに、銃をもつた警官が何人もいる。いつたい何だろう？ 何かが始まるのだろうか。前日街を案内してくれた人が、空爆後もしばらく、ミロシエビツチ派と反ミロシエビツチ派が街頭で争うことが多く、そのために武装警察が多く見られたが、いまはそんなこともない、と言つていたのに……いつたい何なのかわからないまま、私は反射的に席を立つた。が、その姿を見て私は、あつと叫びそうになつた。その人は、膝から下がなかつたのである。思わず警官たちの方を見るとい、彼らもいつせいに、台車のようなものを動かして移動している彼の方を悲しげにじっと見ている。が、その姿は一瞬にして人込みの中に消え、気がつくと警官たちの姿ももうなくなつて、街には、その前からも流れていた、リズム感のあるロックが風に乗つて流れていった。

次の日、ベオグランドから列車ロベニアの首都リュブリヤナに向かつた。十時間の列車の旅である。ベオグランドか

ペヨトル・イン 西部講堂 2002

ペヨトル・ファイナル祭 in 京大西部講堂
“MEMORY”
2002年5月11日(土)・12日(日)

◆会場 京大西部講堂
◆出演 笠井鶴(舞踏手、オイリュミスト)、田中沢(舞踏手、農夫)
野村誠(ピアニカ奏者、現代音楽家)、畠山直哉(写真家)
藤本由起夫、蔡國強、森村泰昌(現代美術作家)ほか
◆主催 ペヨトルin 西部講堂2002実行委員会
◆協力 冬弓舎、JCDN、秘密結社★少女椿団、アーツスタッフネットワーク
◆プレス ときさゆり(関東)TEL:03-3475-7734

昨年のクリスマスに、ペヨトルのファイナリイベント開催について、ご案内しましたが、その後の経過についてご報告します。いまのところアーティストをブッキングするのに精一杯で、具体的な内容を提示できませんが、これまで笠井鶴、田中沢、野村誠、畠山直哉、藤本由起夫、蔡國強、森村泰昌の諸氏が参加に好意的な意志表明をしてくださっています。蔡國強さんが、西部講堂の前庭で火薬ドローウィングすること、畠山直哉さんが、ピンホールカメラで京大西部講堂をドローウィングすること、森村泰昌さんが登場することなど、何となく方向が決まりつつあります。そのほかの詳細については未定ですが、今後も「増殖」する参加アーティストにご注目ください。(2002/02/16 今野裕一「au revoir! PEYOTL...028」より転載)

★今後の情報の詳細については、下記のWebをご参照ください。
<http://www.yo.rim.or.jp/hgcymnk/peyotl/index.html>

ところで

離れ、クロアチア

に入り、そこからさらにスロベニアに近づいていくにつれて、どんどん貧しさを捨て、豊かさの方へ進んでいくという感じが強まつていった。特にザグレブからリュブリヤナへ向かう車窓には、息をのむように美しい山岳の別荘地のような風景が次々に現れたが、さらに下車して見たリュブリヤナは、絵のように美しい中欧の街であった。それに比べると、ベオグラードは、いままさに生きるか死ぬかの戦いの中であつて、躍起になつて生きようとしている、そんな街だけなのだ、と、リュブリヤナに来てみて、

初めてそういう感じた。経済制裁を受けるとは、こういうことなのか、と……いまにして思えば、ユーロでは、車が見すばらしく、道路もガタガタしていたし、ホテルのトイレット・ペーパーやタオルなども質素で不足し、旅行者の姿もほとんどなかつた。ユーロは、十年に及ぶ経済封鎖や内戦や空爆でありして丹念にチェックするのだった。クロアチアとスロベニアの国境でも同様だった。けれども不思議なことに、ユーロにいる時は、全くそのように感じなかつた。それは、彼らのユーモアと誇りを秘めた落ちついた態度からきていたのだろうか。爆撃された建物がまだ所々に残つていて、そのピカピカの車や物や広告が溢れている日本よりも豊かな何かを感じずにはいられなかつたのである。＊

■プロフィール (もとよし・みづえ) 熊本県立大学教員。ドイツ文学専攻。二十世紀初頭の文学、主にカフカを中心にして研究してきたが、二〇〇一年、本文でも言及したペーター・ハントケの「空爆下のユーロラビア」を翻訳。ユーロからの帰途、パリ郊外に住むハントケにも会つてきた。これについては別途「ペーター・ハントケへの旅」(ラテルネ 同人社、二〇〇二年三月刊行予定)に記述した。

ユーロの延々と続く中を、列車はゆっくり進んでいた。最後尾に食堂車がついていて、クロアチアの店員が、乗り込んできた。ユーロ側、クロアチア側での各々の検問があり、時間をかけて列車の下なども覗いた。しかし、ユーロとクロアチアの国境では、ユーロ側、クロアチア側での各々の検問があり、時間をかけて列車の下なども覗いた。ユーロ側、クロアチア側での各々の検問があり、時間をかけて列車の下なども覗いた。ユーロ側、クロアチア側での各々の検問があり、時間をかけて列車の下なども覗いた。ユーロ側、クロアチア側での各々の検問があり、時間をかけて列車の下なども覗いた。ユーロ側、クロアチア側での各々の検問があり、時間をかけて列車の下なども覗いた。ユーロ側、クロアチア側での各々の検問があり、時間をかけて列車の下なども覗いた。

初めてそういう感じた。経済制裁を受けるとは、こういうことなのか、と……いまにして思えば、ユーロでは、車が見すばらしく、道路もガタガタしていたし、ホテルのトイレット・ペーパーやタオルなども質素で不足し、旅行者の姿もほとんどなかつた。ユーロは、十年に及ぶ経済封鎖や内戦や空爆でありして丹念にチェックするのだった。クロアチアとスロベニアの国境でも同様だった。けれども不思議なことに、ユーロにいる時は、全くそのように感じなかつた。それは、彼らのユーモアと誇りを秘めた落ちついた態度からきていたのだろうか。爆撃された建物がまだ所々に残つていて、そのピカピカの車や物や広告が溢れている日本よりも豊かな何かを感じずにはいられなかつたのである。＊

■本紙は●哲学／思想●文学●詩●映画●舞踏／ダンス●演劇●音楽●アート●コミック●生活●医療福祉●教育●スポーツ●インターネット●フェミニズム●セクシュアリティ●出版などをテーマに、思想・文化情況の〈現在形〉を各執筆者のトボス=視点から批判=論評を試みます。そして表現を通して「他者」との交差、あるいは「視座」の交換=相互性を志向します。

また本紙は、ウェブマガジン『カルチャー・レビュー』とリンクしておりますので、併せてお読みください。

■本紙への感想・投稿・叱咤・激励・投げ銭・木戸銭など、熱烈歓迎。

■本紙10号の予告(02/06/01発行)◆DV法施行後あるいはその周辺の課題(仮題)／長谷川京子◆日本語とコミュニケーション論(仮題)／岩田憲明◆正しくおもしろく、やわらかく生きた男——マルセ太郎／金 梨花◆うらわ美術館の本に対する取り組み(仮題)／同美術館学芸員◆無軌道のススメ(仮題)／ミルキィ・ソバ

本紙賛助会員募集

本紙は、京阪神地区の主要書店(一部東京)・図書館・文化センター等に配布し、配布状況は順次ウェブ(<http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe.lavue.html>)に掲載しております。

本紙は、市民の相互批評を目指す媒体として、読者の方々の「投げ銭」及び「木戸銭」というバトンを設けており、非営利的に発行しております。額は100円は、読者の方々の「投げ銭」の目安です。

また、本紙を安定的に発行するために、賛助会員を募っております。年会費一口1000円(9号~12号までの定期購読料+送料+投げ銭)からの「木戸銭」を申し受けております。

■「投げ銭」「木戸銭」は、切手にても承ります。
■郵便振替:「るな工房」00920-9-114321

るな工房/黒猫房/窓月書房



自費出版等のご案内

◎ご希望の造本で製作致します◎

るな工房/黒猫房/窓月書房では、自費出版(特装本・限定本・記録集など)から商業出版まで、編集・製作・DTP・装幀・デザインなど出版全般のお手伝いを申し受けます。お気軽に、ご相談ください。

■TEL/FAX:06-6320-6426
■大阪市東淀川区菅原7-5-23-702
■<http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html>

■編集後記
★本紙は第三期に入りました。お陰様で刊行間隔と編集製作のリズムが身についてきました。本紙などのボリュームの季刊紙では、人稿締切は発行日の二ヶ月前としている。それから文字校のみの初校を出して、この時点まで著者が加筆・訂正などをお願いしている。その後の再校は、文字校と図版等の確認をしていただく。その後、DTPでレイアウトを組んで、タイトル回りや写真・図版・広告・スベースなどを調整して最終校正をするわけなのだが、この段階でも編集者(黒猫房主)のミスで誤植や脱字が出てくるので油断はできない。この校正に纏わる話題は奥深くて尽きないが、高橋輝次編著『誤植読本』(東京書籍)や倉坂鬼一郎著『活字狂想曲』(時事通信社)はお薦めの本です。

★窓月書房から、昨年刊行したデジタルブックとは趣をかえて、風情のある和紙造本の歌集を3月下旬に刊行します。定期詩には、言葉のリズム・律の美しさが顕著ですが、「リズムはすくなくとも二重の時間性からなる構造」であると示唆にとむ洞察をした菅谷規矩雄によれば、七音は日本語のリズムの統括力において限界だという。この限界を超えると、音声知覚と意味統覚の融合から生じる言語体験としての快感が損なわれるということらしい。ちなみに、菅谷の指摘した「二重性」とは「拍の運動法則たる等時的反復と、それにたいする非等時的傾向性との相互作用が、表現の構造としてのリズムをうみだす」という「(詩的)リズム——音数律に関するノート」(大和書房)ことである。

★遠くに逝くひとの声に滲みて、近しきひとの言葉消ゆ

LaVue

■「La Vue」No.9 ■発行日:2002/03/01 ■価格:100円(税込) ■編集委員:いのうえ なおこ・小原まさる・加藤正太郎・田中俊英・山口秀也・山本繁樹
■制作・デザイン:いのうえ なおこ <http://www5a.biglobe.ne.jp/~maoniao/> ■発行人:山本繁樹 ■郵便番号:「るな工房」00920-9-114321
■発行所:るな工房/黒猫房/窓月書房 © 大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 TEL/FAX 06-6320-6426
E-mail:YIJ00302@nifty.ne.jp <http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html> ■協賛:哲学的腹ペコ塾
■後援:ヒントブックス <http://homepage1.nifty.com/hint-yf/> 英出版研究所 ■印刷所:日本データネット株式会社